

『古事記』に見る 建築用語

イヅミガ

日本海文化悠学会も、『古事記』を読む会も、1月はお休みですが、『古事記』の12月例会の席で、針山 康雄 さんから2月例会で発表予定のレジュメをいただきました。タイトルは「『古事記』に見る 建築用語を考える」。一級建築士の肩書を持つ針山さんが、建築工学の目で、『古事記』の中から建築関係の用語を拾いあげ、分析・整理の作業をすすめておられます。

建築や土木について、わたしはまったくの門外漢ですが、せっかくのチャンスなので、いっしょに勉強させていただきたいと思っています。わたしにできることといえば、針山さんがとりあげた用語について、まず戸籍しらべをすること。すこし具体的にいえば、日本語(ヤマトコトバ)の原理・原則にたづね、その単語家族関係をたしかめること。あわせて、できれば漢語や英語などとの音韻対応関係についても考えてみることです。意外な対応関係が見えてくるかもしれません。どこまでやれるか、楽しみにしています。

針山さんは『古事記』の記事の順番にあわせて、建築関係用語をとりあげています。全部は紹介できませんが、わたしがかってに選んだだけでも、「ツクロフ[修理]・ハシ[橋]・ハシラ[柱]・トノ[殿]・ト[戸]・カド[門]・カキ[垣]・タルキ[垂木]・モヤ[喪屋]・タタミ[畳]・ウブヤ[産屋]・イハオシワクノコ[石押分之子]・ムロ[室]・ムロヤ[室屋]・カハヤ[厠]・カナトカゲ[金戸蔭]・カツヲ[堅魚]・ミヤ[宮]・ミカド[御門・朝廷]」など、いろいろな語音のコトバが採集されています。さて、これだけ雑多な語彙資料をどう分析し、どう整理すればよいでしょうか？

わたしは、まずヤマトコトバの組織原則にしたがって、音形ごとに単語を区分します。そのうえで、基本的な音形や意味(事物の姿)を共有する単語をまとめて単語家族として分類・整理します。具体的には、イヅミが考案した「64音図」(50音図の改良版。日本語だけでなく、漢語・英語にも適用できる)を利用することで、比較的簡単に分類作業がすすみます。

カタ・ケタは、k-t音タイプ

カツヲ[堅魚]・カド[門・角]・ミカド[御門・朝廷]などは、k-t音を共有しているので、k-t音タイプのコトバとして分類することができます。上代語の2音節動詞として、カツ[勝]・カツ[合](合わせる)・クツ[朽]・ケツ[消]などが成立し、そのまわりにカタ[方・肩・形・像・渦・葛]・カチ[歩]・カヂ[梶・櫂]・カヂ[鍛冶]・カテ[糧]・キタ[北]・キダ[分・段]・クダ[小角・管]・クチ[口・鷹]・クツ[履・沓]・クヅ[屑]・ケタ[桁]・コト[琴・言・辞・殊・異・別]などの2音節名詞もできています。多音節の動詞では、カタス[鍛]・カタツ[崇](あがめる)・カタドル[像・象]・カタブク[傾・斜]・カタム[堅・固]・カタヨル[片縁]・カタル[語]・カヅク[潜]・カヅラク[獲]・カトル[主・校・制]・キタム(こらしめる)・キタル[来・来至]・キヅク[杵築]・クダク[摧]・クタス[腐]・クダス[下・降]・クダル[下]・クツガヘス[覆]・クツガヘル[覆]・クヅル[崩]・ケヅル[削・梳]・コタフ[答・応・対]・コトヅ(口に出して言う)・コトホク[言寿・賀]などがあります。

カツは もともと「合わせる」こと ですが、「米を **カツ**[搗]

と いえば、「玄米の 一部を **カチ**割る」 こと(精米) です。剣道の 試合で いえば、「相手の 面を **カチ**ワル」 ことが **カツ**[勝] こと に なります。

「コトバは コト [言] の ハ [端]、カタリ [語] の ワン カット] と 考えて みるのも おもしろい と思います。カチワル 姿は、漢語でも **カツ** [割]、英語でも cut です から、音形・基本義とも **カッチリ** 対応して います。腰を すえて、**キッチリ** しらべてみる 価値がある と思いますが、いかが でしょうか？

富山弁には、**カチアゲル**・**カチコム**・**カチコワス**・**カチワル**・**カツカル**・**カツケル**・**カッチャ**[搗屋]・**キトキト** など、かなり たくさんの k-t 音語がある ようです。

タツ・タタムは、t-t 音タイプ

タタミ[畳]は、動詞 タタムの 連用形 であり、また 名詞形 でも あると 考えます。タタムは、もと「**タタ**[楯・縦]+ム」の 構造で、「**タタ**[縦・楯]の 姿に する」こと。その **タタ**[縦・楯]は、動詞 **タツ**[絶・裁・立・断](四)・[立](他下二)の 名詞形で、**タテ**[縦・楯]の 交替形。つまり、2 音節動詞 **タツ**を 中心に、名詞 **タタ**・**タテ**・**タタミ**や 動詞**タタム** などが **タチ**ならば、t-t 音の 単語家族を 組織して いると 考える ことができます。タテや **タタミ** だけではありません。**タチ**[大刀・館]や **タツ**[竜・辰] なども、t-t 音語としての 基本義「**タツ**[立・断・絶・建]もの」の 姿を 共有して います。さらに いえば、上代語 2 音節動詞として、**タツ**と ならんで、**ツツ**[伝](伝える)・**トツ**[閉]が 成立している ほか、その まわりに **ツタ**[蔦]・**ツチ**[土・椎]・**ツチ**[土・地]・**ツツ**[筒・管]・**ツト**[++包]などの名詞が成立。3 音節以上では、**タタク**[叩]・**タタカフ**[戦]・**タタズム**[佇]・**タタヌ**[畳](=タタム)・**タタフ**[湛]・**タタフ**[称]・**タタル**[崇]・**タツヌ**[尋]・**タテマツル**[奉・献]・**タトフ**[譬]・**チダル**[千足]・**ツタフ**[伝](伝わる。伝える)・**ツツク**[次](自四)・[続](他下二)・**ツツム**[包]・**ツツシム**[慎]・**ツドフ**[集]・**ツトム**[勤]・**トダル**[十足]・**トツグ**[嫁]・**トトノフ**[整]・**トドマル**[留]・**トドム**[留・停]・**トドロク**などの 動詞も 成立して います。動詞の まわりには、もちろん t-t 音の 名詞・形容詞・副詞 なども 成立して います。

この作業を すすめる 場合、どんな 漢字で 表記されているか も 問題ですが、漢字は もともと 漢語にあわせて 作られた モジ であり、ヤマトコトバのために 造られた モジではありません。いわゆる「**訓読み**」の 漢字は、**アテジ** [当て字] に すぎません。漢字の 便利さに たより すぎると、ヤマトコトバの 実態を見失う おそれがあります。**漢字の 字形は 参考にとどめ**、あくまで コトバの **オト(音形)**を たよりに、t-t 音 単語家族の 実態を **タツネル**[尋] べき だろうと 思います。

タルキ・トリキは、t-r 音タイプ

タルキ[垂木]・**テラ**[寺]・**トリキ**[鳥居] などは、t-r 音を 共有している ので、これらを t-r 音タイプとして 分類する ことができます。上代 2 音節動詞として **タル**[垂・足]・**チル**[散]・**ツル**[釣・吊]・**テル**[照]・**トル**[取] などが 成立している ほか、**テラ**[寺]・**テラス**[照]・**アマテラス**[天照](神名)・**タラシヒコ**[帯日子](天皇などの人名)などの 用例も 見られます。

ただ、「**t-r 音語の 系譜**」については、12月4日 「古事記を読む会」での 提案資料(補足)、サブ タイトル「**アマテラス**」と **テラ**に よせて」として、報告済み なので、くわしい 報告は 省略させていただきます。

ツカ・ツク・ツクルは、t-k 音タイプ

ツク[衝・策・築・漬・給・尽・著・附]・ツグ[継・次・告]・ツクル[作・造]・ツクロフ[繕]などは、t-k 音タイプとして分類することができます。上代語 2 音節の動詞としてタク[焼・焚・]・タグ[喫]・ツク・ツグ・トク[着・解]・トグ[磨・研・遂]など、名詞としてタカ[鷹・竹]・タキ[滝]・タケ[竹・嶺・岳]・タコ[蛸]・ツカ[塚・握・束]・ツキ[坏・月・調]・トガ[咎]・トキ[時]・トコ[床]などが成立しています。また、多音節動詞に、タカブ[衿]（たかぶる）・タガフ[違]・タガヘス[耕]・タカル(①高くなっている。②集まる)・タギツ[激・滝]・タクハフ[蓄]・タグフ[類]・タクム[巧]・タケル[感]・チカツク[近着]・チカフ[誓]・チギル[約束]・ツカサドル[掌]・ツカフ[用・役・仕]・ツカム[掴・攫]・ツカル[疲・労]・ツガル(つながる)・ツキタツ[築立・植]・ツキハム[啄]・ツクス[尽]・ツクノフ[償]・ツクル[作・造]・ツクロフ[繕]・トキサク[解放]などがあります。

テが ツク とところが ツカ。ツカを ツカんで、ツギツギ・タクミに、さまざまなものをツクル・ツクロフということになります。ツク[付・附]と ツグ[継・次・告]の関係についても、ク(清音)と グ(濁音)のチガイだけなので、基本義は共通。Aと Bをツケル・クツケル・ツナグ 姿は、やがて A(またはB)が ツナガル・ツグ [継] 姿。Aが Bにむかってコトバを ツケル・ツナグ・ツグ [継] 姿=ツグ [告]、ということになります。

ミヤ・ウブヤ・ムロヤの ヤは、y-a 音タイプ

ここで一つ、すこしかわった音タイプの語音について考えてみましょう。『古事記』に出てくるヤはいろいろあり、建造物関連ではウブヤ[産屋・産殿]・カハヤ[厠]・ニヒナヘヤ[新嘗屋]・ヒトヤ[獄]・マヤ[厩]・ミヤ[宮]・ムマヤ[厩]・ムロヤ[室屋]・モヤ[喪屋]・ヲヤ[小屋]などがあります。すべて「～ヤ」の構造で、ヤは漢字で[屋]と表記されるのが普通ですが、[殿・谷]と表記された例もあります。ウブヤでも、カハヤでも、ムロヤでも、どれもみな、人や動物を入れる建造物ですから、ヤマトコトバとしてはヤ 1語であり、漢字の字形にこだわる必要はないと考えることもできます。

それにしても、ヤマトコトバでイへ[家]というコトバがあるのに、同一事物をヤ[屋]と呼んだのでしょうか? 「そんなヤボな話」といわれるかもしれませんが、ここでヤ[屋]の戸籍しらべをしておきましょう。

ヤマトコトバの音韻組織をしめす「50音図」をみると、まず母音がアイウエオ5個あり、以下カ行音・サ行音など、それぞれ5個ずつあることになっていますが、ヤ行とワ行では、かなり変則的な現象が見られます。ヤ行音独特の音形をもっているのは、ヤ・ユ・ヨだけで、イの段、エの段ではア行とおなじ音形となっています。ワ行でも、ワ・ヰ・ヱ・ヲはワ行音独特の音形をもっていますが、ウの段だけは、ア行とおなじ音形となっています。

どうしてこうなったのか?それは、ヤ行音・ワ行音の構造が、カ行音・サ行音などくらべて、特殊な構造をもっているからです。たとえば、カは「子音k + 母音a」の構造。サは「子音s + 母音a」の構造。ところがヤは「半母音y + 母音a」の構造。ワは「半母音w + 母音a」の構造。yは、「母音iから他の母音に変化するときに生まれる音形」。Wは、「母音uから他の母音に変化するときに生まれる音形」。したがって、ヤ行イ段が

ア行の イと おなじ 音形と なり、ワ行の ウが ア行の ウと おなじ音形と いう のは、当然とも いえます。ヤ行の エについては、(ワ行の エの ように) いちど「y + e」の 音形になっ たものの、その後 y 音が 脱落したと 解釈できる かもしれません。

(時間が なくなりましたので) 以下、結論だけ 申しあげます。ヤマトコトバの ヤ音には、感動詞の ヤ[咄]、名詞の ヤ[矢・箭]・[屋・舎・家]、数詞の ヤ[八・弥]、副詞の ヤ [弥]、助詞の ヤ[哉・也] など、さまざまな 意味用法の ヤがあり、現代人の 感覚では、共通する 基本義が とらえにくく なっています。しかし、コトバは もともと 人々の 生活の中 で、必要に 応じて 生まれる ものです。口を ヨコ一文字に ひっぱって、イーと 発声する、その姿が「イキをする=イキル」姿 であり、「ヤ[矢]が イク[行・射来]」姿です。また、ヤマトコトバでは、動詞形(～する)の 語尾母音が -aに 変化すると、名詞形(～するもの) となります。たとえば、サク[裂・割]と サカ[坂](裂ける地形)、ナフ[紉]と ナハ[縄](紉ったもの)など。

同様の 感覚で、仮設動詞ユ(イク・ユク姿)の名詞形が ヤ[矢](イク・ユクもの)と 解釈することが できそうです。ユミも ヤも、ヤ行音の コトバ。もともと 狩猟や 戦闘につかう ものですが、矢を 数本 組みあわせる ことで、たちまち テント式の ヤ[屋・舎・家]が できあ がります。

数詞の ヤ[八]は、漠然多数を あらわす ヨ[四]の 語尾母音交替。Yoよりも さらに 大きく 口を開く ya 音によって、断然多数の ハチ[八](=四の 倍数)に 当てた ことが 考えられます。

その他、ヤマ・ヤマトの ヤ、助詞の ヤ[哉・也]などについても、もとは 名詞ヤ[矢]から 意味用法が 変化した ものと 解釈する ほうが、より 合理的だろうと 考えて いますが、その議論 をする 時間が ありません。くわいいい ことは、「教育・文芸とやま」第22号(2016年12月、財法・富山県教職員厚生会)所載の 小論、「ヤ[矢・屋・谷・哉]の 系譜…日本人の 宇宙観を さぐる」を ご参照 いただければ 幸せです。